IFLAヘルシンキ大会と図書館員の国際交流

メタデータ	言語: 出版者: 日本図書館協会 公開日: 2024-01-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦,太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000191

小特集★IFLAヘルシンキ大会レポート

IFLAヘルシンキ大会と図書館員の国際交流

三浦太郎

今年８月11～17日，「世界図書館情報会議（WLIC）：第78回IFLA年次大会」（IFLAヘルシンキ大会）がフィンランドの首都ヘルシンキで開催された。テーマは「図書館は今－ひらめきを，驚きを，活力を与えるもの」である。当地では1965年の第31回大会以来，47年ぶり２度目の開催となった。

▲会場となった国際会議場

現地日本人図書館員との交流

大会５日目の８月15日夜には，日本からの参加者23名と，現地で働く日本人図書館員４名が集まり，元老院広場前のレストラン「ラヴィントラ・サン」で夕食を共にした。こうした交流はIFLAケベック大会以来，４年ぶりとなる。

夕食会開催にあたっては，JLA国際交流事業委員会の平田泰子委員（自由が丘産能短期大学）がエスポー市図書館で働く水野真奈美さんと昨年来，連絡をとっていたが，水野さんからヘルシンキ都市圏内の図書館に勤める，有賀万里子さん（パロヘイナ図書館），マッコネン僚子さん（ティックリラ図書館），オサミツ芳子さん（パシラ図書館）にもお声かけいただき，実現したものであった。

事前のやりとりの中で，水野さんから「フィンランドの図書館事情に関する質問があれば，当日お答えできるようにしておきますので，お寄せください」との申し出があり，日本側参加者から多くの質問が寄せられていた。それらに丁寧にお答えいただき，また現地の方々からも日本事情に関する質問があり，たいへん活発に情報交換がなされた。北欧の夏は21時過ぎまで日が明るいが，この日，レストランを辞したのはすでに夜陰も深まった23時過ぎであった。

フィンランドでは国民の49％が平均して月に１度は図書館を利用し，81％が年に１度は図書館へ行くと言われるが[1]，こうした利用率の高さ，図書館に対する住民からの信頼の高さはどのあたりに由来するのだろうか。水野さんたちのお話を伺

▲夕食会では27名が相互に交流した

う中で，やはり提供サービスの充実が大きいと感じられた。

一例としては，フィンランドは公共図書館における年間貸出点数が18点（2011年）と，経済協力開発機構（OECD）諸国平均の２倍に上るが，利用者は図書であれば１回40冊を４週間（ベストセラーは１週間）借り出すことができる。また，DVDやブルーレイといった映像資料，ゲームソフトも１週間借りることができる。

地域ごとに図書館協力体制が整備され（ヘルシンキ都市圏ではHelmetシステムを構築している），利用者が域内所蔵資料をオンラインで予約し，自宅近くの図書館でそれを借りて返却することも，ごく一般的に行われている（予約・取り寄せには１点50セントの費用がかかり，地域外資料の利用には７ユーロが必要となる）。

最近では英語やスウェーデン語の電子書籍の利用が広がり，それらを読むためのリーダの貸出も実施されているという。ヘルシンキ市の中央館的機能をもつパシラ図書館やエスポー市図書館では，１週間の期限でリーダの貸出を行っている。

子ども向けサービスにも力が注がれるが，とりわけ近年では情報通信技術（ICT）を用いたメディアリテラシーの向上に焦点化されている。月曜日と土曜日の朝90分間ほど，３歳以上の10～20名を集めてパソコン教室が開かれ，そこではクイズ形式で検索方法に親しんでいくという。また，読解が遅れている子どもたち向けに「セラピードッグ」が導入されており，犬に向かってゆっくりと音読することで，子どもたちが寛いだ気持ちで学習を進めることができるよう工夫されている。

▲パシラ図書館の児童サービス室

多文化サービスも図書館の看板と言えよう。フィンランド国内の移民の数は16.7万人（2010年）で人口比2.7％と高い数字ではないが，パシラ図書館には60か国以上の言語の資料が備えられ，多様なニーズに対応している。また，１週間に１回，移民向けにフィンランド語の学習教室が開かれ，広報にFacebookを活用するなど，移民の人びとの目に付きそうな場でのPRにも余念がない。

そして，実にこうしたサービスは多様な人材によって支えられている。日本を離れフィンランドの図書館で職を得た経緯を尋ねたところ，水野さんたちは現地の大学や大学院で図書館情報学を勉強し，図書館専門職としての資格を取得したという。外国人も含めて就業希望者に対し，その職種に必要な資格取得を支援する枠組みがこの国では確立している。

フィンランドの成人教育の現状を考察した大橋裕太郎氏（元ヘルシンキ大学教師教育学部研究員）は，こう指摘する。この国では個人の雇用可能性の拡大に主眼を置いたAdult Educationと，個人の興味・関心に対応したLiberal Adult Educationの２段階の体制が取られており，日本の成人教育支援とは構造的な差があると[2)]。

2000年代に入り，未就業者に対する成人教育の議論を背景に，フィンランドでは30～54歳の成人を重点対象とする学習機会の拡充政策が推進されてきた。とくに専門大学・大学院での資格取得や職業訓練など，学習プログラムを雇用とつなげる意識が強まったという。成人教育は国家戦略の中で，人材活用を図る制度のひとつとして機能しており，そうした就業サイクルの確立は外国人労働者への支援にも通じている。

▲国際会議場前にお目見えした地方のBM

制度が整っているからこそ，外国からの移住者であっても自分に合った職種で働くことができる。図書館でも，サービスを実質的に支えるさまざまな人びとが，このようにして職場に迎えられているのである。

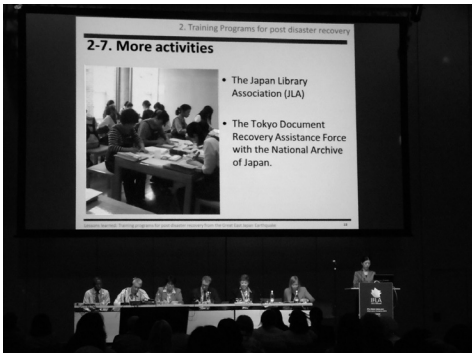
大会概要

さて，今回のIFLAヘルシンキ大会を簡単に振り返る。本誌10月号NEWS欄に既報のとおり，分科会やグループの会合が主に初日（11日）に設定され，翌日に開会式が行われた。大会参加者は120以上の国と地域から3,000名を超え，218のセッション（このうち公開約90），83の企業展示ブース，ポスター発表196件（申込受理）が集まった。期間中はセッション発表のほか，「文化の夕べ」，総会，閉会式などが実施され，最終日（17日）に32か所（周辺都市や国外を含む）で行われた図書館ツアーを以て幕を閉じた。

▲3,000名を超える参加者が集った

日本からの事前登録者は30名である。このうち，長塚隆氏（鶴見大学）ら６名がプレ会議やセッションなどで発表したほか，小田光宏氏（青山学院大学）ら５名がポスター発表を行った。筆者も，井上靖代氏（獨協大学）と共同で「震災と図書館：日本図書館協会の図書館支援プロジェクト」について，また，杉本ゆか氏と共同で「2011年東日本大震災・津波以降の日本の図書館の復興状況」について，それぞれポスター発表を行った。準備にあたり，昨年同様にJLA東日本大震災対策委員会の西村彩枝子氏，ならびに泉山靖人氏（東北大学）に写真提供など，ご協力いただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

公開セッションでは，直近２年間に開かれたIFLA大会と同様に，「オープンアクセスとデジタル情報源」，「政策，戦略，広報」など，五つのサブテーマが設けられた[3]。



▲公開セッションの様子

いくつかのセッションに参加したが，ここでは，サブテーマ「アイデア，刷新，新しい局面への期待」に区分された「革新的な図書館：我われのコミュニティを変える」（15日13:45～15:45。「アジア・オセアニア分科会」主催）を紹介しておきたい。このセッションでは，ニュージーランド，バングラデシュ，インド，日本，フィリピンの事例報告が行われ，各国図書館の置かれた環境が多様であることを改めて感じさせられる内容であった。

日本からは，長塚氏が「ラーニングコモンズの一部としての学習支援サービスの重要な役割」と題して発表し，日本の大学図書館の変革状況を述べたのち，学習アドバイザー（大学院生）による学習支援サービスの意義を論じた。鶴見大学で配置している学習アドバイザーに対するインターネット調査の結果から，学習アドバイザーが学部学生にとってメンターとしての役割を果たし，学習推進に効果を上げたことが紹介された。

また，同じセッションではバングラデシュのナシルディン博士（ラージシャーヒ大学）の発表「避難所コミュニティ図書館：ダッカにおける路上生活者の生活改良調査」も印象的であった。バングラデシュの首都ダッカには貧困層が多く，路上生

活者も1.5～2.0万人と推計されている。こうした人びとには教育や福祉厚生といった人間的権利が保障されていない。発表者らは2008～11年に行った“They're People, too”プロジェクトの一環として，主に女性と子どもの生活実態調査を行い，新たに設置したコミュニティ図書館が職業訓練やラーニングセンターとして，そうした人びとの生活権の保障に大きく寄与している点を指摘した。

それぞれの国や地域の図書館の抱える多様な問題を持ち寄って討議し，参加者各自の知見を広げることは，国際会議に出席する大きな意義であると言える。

分科会会議

IFLA分科会とコア・アクティビティには，現在，25名の日本人図書館関係者が委員として参加している（JLAからの推薦は9名）。委員各位にはご多用中のところ参加していただき，この場を借りて御礼申し上げる。

▲図書館ツアーで訪れたヘルシンキ大学図書館本館（左）とフィンランド国立図書館（右）

筆者も昨年から図書館協会運営分科会（Management of Library Associations Section：MLAS）の委員を委嘱されている。本大会では初日（11日）12:30-15:00と16日8:00-9:30の2回の会議に出席したほか，13日9:30-12:45にはMLAS主催の討論型公開セッションに，また，14日16:00-18:00にはジェニファー・ニコルソンIFLA事務局長の主催する国立図書館協会会議に参加した。13日夜には市内老舗レストラン「サルヴェ」で夕食会が開かれ，気軽な雰囲気で交流を深めた。

▲討論型公開セッションにて

一連の会議では，IFLA理事会（GB）報告，2012年冬季会議の報告，関連の特別研究グループ（SIG）（新たな図書館員職グループ（NPSIG）と女性情報図書館グループ（WILSIG））の報告があったほか，IFLAの新たな活動の柱である「BSLA（Building Strong Library Associations）プログラム」が紹介され，ボツワナ，カメルーンなど6か国における図書館協会広報の取り組みが取り上げられた。会議には18名の正規委員（2名が欠席）のほか，各国の図書館協会長や事務局長ら約20名がオブザーバとして列席した。

最後に，来年は8月17～23日にアジアでIFLAシンガポール大会が開かれ，翌2014年はフランス・リヨンでの開催となる。IFLA分科会委員の方をはじめ，現場の図書館員，大学の研究者，大学院生など，関係の皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

［注］いずれも最終アクセス日は2012年10月10日

1）Sami Serola“The Benefits of Public Libraries in Everyday Life,”Finnish Libraries Now!［http://now.libraries.fi/benefits.html#.UHzL267jZ2I］

2）大橋裕太郎「「生涯学習としての情報教育」を支えるフィンランドの図書館の特徴」『メディア教育研究』vol.6，no.2，2010，p.1-13.［http://www.code.ouj.ac.jp/wp-content/uploads/gencho_1.pdf］

3）各セッションの発表資料については，IFLAホームページ「プログラムと会議録」［http://conference.ifla.org/ifla78/programme-and-proceedings］で，その多くを見ることができる。

（みうら　たろう：JLA国際交流事業委員会委員長，明治大学）

［NDC 9：010.6　BSH：国際図書館連盟］